＜2013年度　第1回定期研究会＞

不登校・ひきこもり支援の現状と課題

シンポジスト：
黒田　信子（スクールソーシャルワーカー＜湧心館高等学校・鹿本商工高等学校＞本学キャンパスソーシャルワーカー）
伊津野晋平（くまもと若者サポートステーション総括コーディネーター）
若者サポートステーション利用者
コーディネーター：
山崎　史郎（熊本学園大学社会福祉学部教授）

日　時：2013年10月5日(土) 13時～15時

2013年度第1回定例研究会では、「不登校・ひきこもり支援の現状と課題」というタイトルのもと、黒田信子氏 (スクールソーシャルワーカー) と伊津野晋平氏 (若者サポートステーション総括コーディネーター)、若者サポートステーションの利用者をシンポジストにお招きし、本学社会福祉学部教授の山崎史郎氏にコーディネーターを務めていただきました。以下、その概要を報告いたします。

＊　＊　＊

まず、コーディネーターの山崎史郎氏から次のような趣旨説明がなされた。現代社会において「不登校・ひきこもり」の問題は極めて身近でありながら、私たちがそれをどう理解し、必要に応じた支援につなげるかという具体的な情報はなかなか得にくい。そこで、本研究会では、支援を必要としている当事者たちに対して、これまで現場でサポートされてきた専門家たちによる事例報告を通して、そこでの現状や課題について話していただく。学校教育の過程において、またその教育から離れた後に、「不登校・ひきこもり」の状態に至った時、周囲がどういうサポート体制をとれるか、当事者や家族、周囲にとっての一つの方向性として、支援の形を模索することが研究会の趣旨である。

黒田信子氏は、スクールソーシャルワーカーの長年にわたるご経験から、中学校、高校の具体事例によって、どのような段階にサポートが必要であり、どのようにそのサポートをつなげていく必要があるのかについてお話しされた。当事者のお話を傾聴すること、その背景にあるご家族のことを含めて、丁寧に対応していくことの大切さを強調された。また、不登校の芽を見逃さないという予防という視点も重要であること、しかしながら学校教育を離れたあとはサポート体制からも離れてしまうことも指摘された。

続いて、伊津野晋平氏は、主に高校以降に学校という支援制度から離れたあとに、「不登校・ひき

こもり」にはどのような支援の可能性があるのか、ご自身の活動を通してお話しいただいた。伊津野氏は、地方自治体との協働で実施する厚生労働省の委託事業であるNPO法人おーさあ「くまもと若者サポートステーション」を統括されていて、若者の職業的自立に向けた総合的サポートを行っている。そこにはきめ細かなサポートの形があるにもかかわらず、その存在を知らない人が多いこと、しかしながら、そこで実施できることの限界などについて財政上、制度上の問題を含めて指摘された。最後に、伊津野氏が統括しているサポートセンターの利用者から、ご自身の体験にもとづいた振返りや課題などが語られた。ひきこもりに至った理由やサポートセンターを利用したきっかけ、就業に向かう過程などを真摯にお話しいただいた。

フロアからも積極的に質問が出て、具体事例に即した、率直な意見が交わされた。活気に満ちた討議が行われて、現状の支援の形や問題点などを確認して、閉会した。

＊　　＊　　＊

本研究会のテーマは、昨年度の「発達障害」についての講演が非常に関心を集めたことを受けて、企画されたものでした。本研究会の課題は、教育制度や就業に何らかの問題を抱える形の一つとして位置づけています。趣旨説明にもありますように、身近な問題ではあるけれど、具体的に周囲がどういう情報をもち、どういう形で関わればいいのか、支援の形はどのようなものがあるのかなどについて、現場からの具体的な報告により議論が深まり、一定の方向性が確認できました。また、なかなか機会のない当事者による貴重なお話には、非常に説得力があり、私たちが今後考えていくべきことなどを実感させられました。その語りにもあったように、サポート以前に私たちが、「不登校・ひきこもり」にどのような姿勢やまなざしをもって向かうべきかも問われるものでした。さらに、黒田氏や伊津野氏のように、真摯に丁寧な対応でサポートに尽力されている方々が疲弊しきらないような制度的整備も喫緊の問題であると考えさせられました。非常に有意義な研究会となりました。

(研究会報告担当者：萩原　修子)